



復 雙言

月氷奇縁

四

^ 13
3103
4



門 へ 13
3103
卷 4



月氷奇縁卷之四目錄

第七回

忠臣促駕歸鎌倉

貞婦典身赴岐岨

陷仇家玉琴死節

過客店倭文感標

第八回

月氷奇縁

卷之四

昭和九年
七月三日
購求

第四篇

信州岐岨山房

一名信宿繁

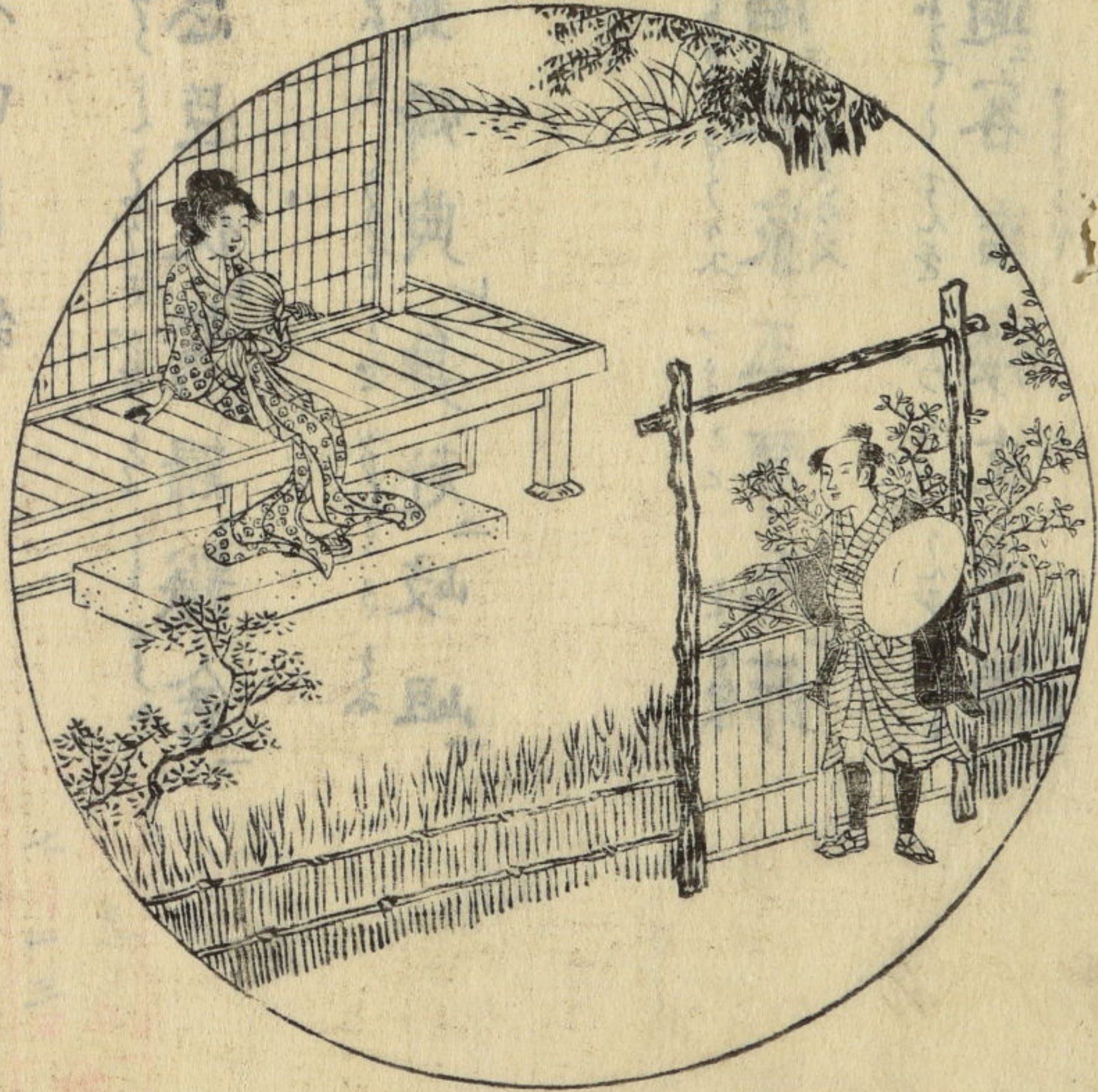
夢魂忽待行

客到柴門夜

未座淚銷紅

粉徒遣蕃郎

問點人



月水奇縁卷之四

東都 曲亭馬琴著編

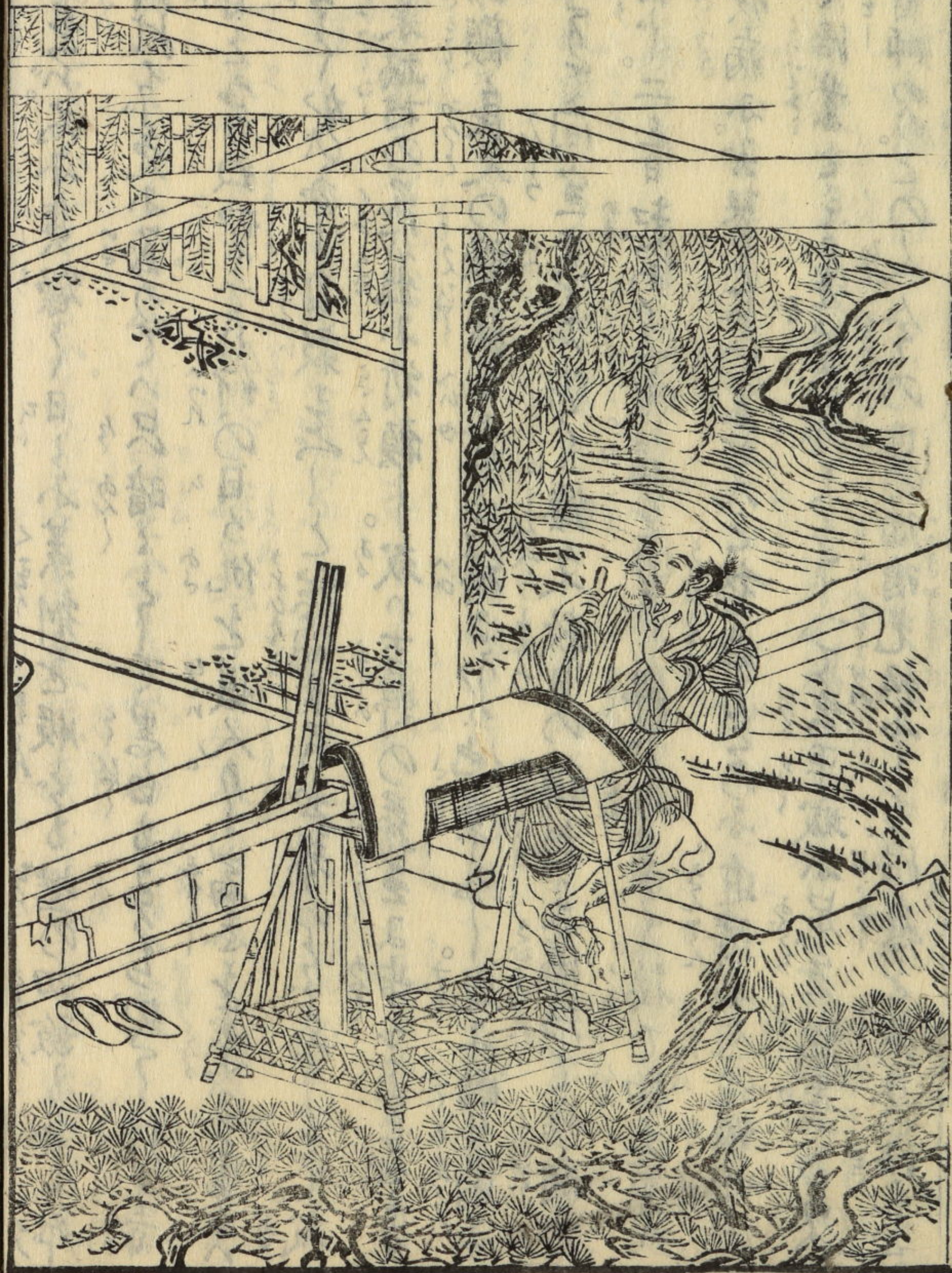
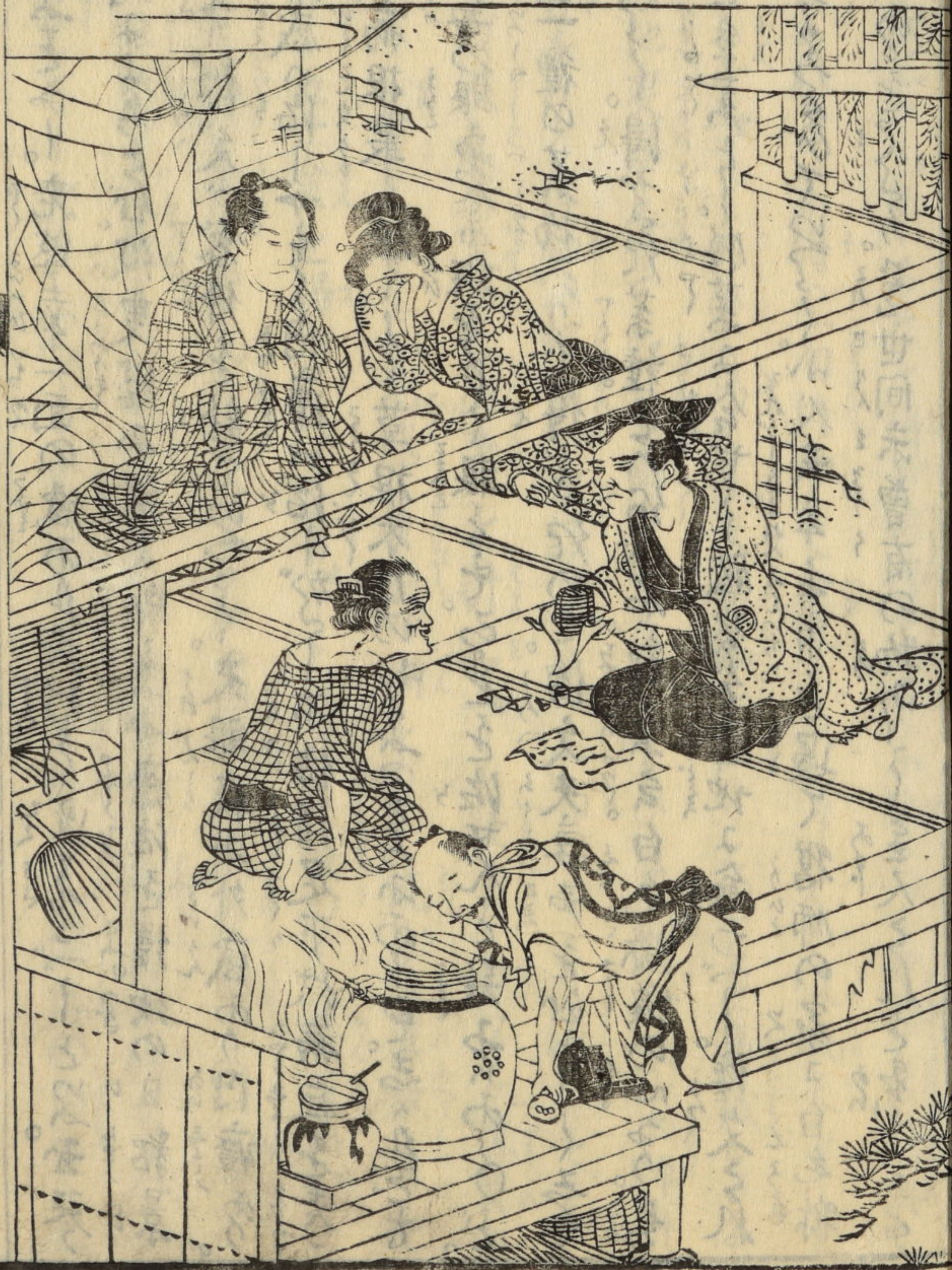
第七回

忠臣促駕歸鎌倉
貞婦典身赴岐岨

是時お琴の父母の溺死を聞き、愁傷をこころ遣かたや、
 共この河此津とありんと汀渚の上お琴を倭文に抱け
 たり。この物お琴の父母の顧命を何とぞや、少刻あるを察て
 たり。お琴も母をせよといふ腹を夫人も又練ぬ。若く父母已し恩を
 報せられぬ死に、お琴子をわりのあつたあつたや。さうも平昔に
 爽利くお琴をさし、諭得一身のやど、お琴も思ふ方、お琴の性
 命を全し、お琴母は志をたれ、お琴も思ふ方、お琴の君命

のきれは固辞がきく。志をくくその死をさきりけり。倭文又ひく。
 你と吾との元讐敵なむと。你的父亡年難育の恩ありて既小猶
 まるふ死をひきて且継母に顧命のつとも重。いふで潘楊の好を被
 らん只縁ふとさうまき小石見太郎を討て先考する靈ふ身向人
 のまのあれど今仇人の所を志すど特小夫人邊絶ふ零落
 志ぬしど身を教やと。仇を探索か。他日君家れ存亡を
 定るのらあをを撃もどおそうどとひとも恨らくは二十余年
 の星霜を經く石見が生死を志すど加之渠が相親を視と
 かんむい。目前あはと會さるも何を以りまがまとせん。う
 遮莫運も皇天ふちらせ夫人世よおあふのちまき。仇人の志を
 を行ぐと教諭けむ。玉琴う良人の志をひく。ちえさむ心を安

く。流涙をさめける。この時夜已まあけ。旭日宮堯ふ昇て丹
 景白雪ふ映。紅輝晃くとして満山酔るがど。十分れ好景
 倭文地あまつたて。云前夜上市の危強より只管雪中を毒を
 て夫人いど。罷病あひ自家の幸よありて君を若めなる。ふ敵あり
 ふ忠あり。そなく出田よく。と。夫妻夫人を扶掖く。之ゆ人と
 ちとさう。只見一癖の人馬川よを。馳まると。敵る身方の
 と。頼つ。稍間ちく。なる。小眼を定め。それを視む。一個の
 衣束身。小の鬼。裾の履。襟。袖。を装束。腰。小。金。送。の。西。刀
 を。跨。て。馬。を。走。先。ふ。と。死。士。率。四。五。十。人。を。將。り。ま。り。夫
 人の川よまあをを。馬より。下。ま。れ。と。ら。近。洋。く。し。り。
 く。小。人。の。中。村。長。衛。重。新。と。名。告。く。植。杖。武。敏。少。捕。房。頭。れ。老



傳つとむひ今いまの源げん姓せいと時ときく人ひとち。さるるふ益えきなる幸さい福ふくあるんとす。
 玉たま琴ことひらのあろ良よし人のあは黄金こがねをさすの人とせりよのそを
 是こゝバ別わかはるるをを用もちふるふおのそは。とあつち終つひん王おうを約やくし
 けはバ老おきな婆ばふろさむく裳もてを裏うら又また忙いそしく走はし去まけりガ選まが選く
 ありて轎こし夫と一ひと枚まいの轎こしを握にぎせ引ひ客きやくの從しゆ僕ぼくを伴とも來かて傳つと文ぶん
 夫と妻さいより合あせけはばらの僕ぼく一ひと枚まいの身み契せきをとり出だし。續つづせ
 て傳つと文ぶんが印いん信しんを歎なげせ身み價げ一ひゃく金ごんを遍あま子こけり。あま終つひを
 玉たま琴こと辞こと別わか人ひととてふる何なにころもふおのそは。病やまを潜ひそ密みつと落おし
 てしりく。ころ身みを賣うるは病やまを治なぐ。病やまを治なせんし
 てこの身みを賣うるは又また省しやう疾やくさるるのふ。日光にちかうがころ終つひど
 野の千ち五ごの目めええぬを隻しやく身みとちりて。疾やく愈いとあは。

終つひふ此こゝのやのぞきぬらん是こゝ渴かつを止とんりて鶴つるを飲のは異いつらば
 といひくも轉ま倒たう声せいをさるらて哭なげはバ老おきな婆ば慌わうしく扶たす起たて
 して。あろば死ししあ室むろを黄金こがねだまあまのあは人ひとを備たもても
 幸さい只ただあん老おきな婆ばも又またをさるる來き訪ぼうづとふ彼か僕ぼくも又また耐たえ
 して。小人こじんが主人しゆじんの信しん陽やうカ一の豪ごう家かなり。りしはて寵ちゆう遇ぐ
 を得えぬら山さん豆まめ秋あきこの百ひゃく金ごんのさるんや。さふ勝かち分ぶんれ惠めぐみ
 ばし。さく泣なみをさるる久く轎こしは素すあんとさむ傳つと文ぶん涙なみをと
 めてさ。やま玉たま琴こと我われ們ら夫と妻さい前ぜん世せいの此こゝ業ごうあけははこそ。さ
 百ひゃく折せ千せん磨まをさるる終つひり分ぶん鏡きやうのらるる渴かつむ。夫と妻さい完かん娶と
 ともある。只ただ顧こるるを慎しん熱ねつく性せい命めいを傷やむるれ。さ
 病やまだ愈いはりて會あひ。玉たま琴こといし泣なみてしりく。さるるかの

地おろりるべ。や。郷音をよびて。只日夜。再會を供作るといひて。壁樹裏より。梳具匣をとる。出でて。髻髪を將。玉琴。今已。村落中。埋と。更。糞粉を施。と。性格たる。野。編。目。艶。村酒人之。醉。む。が。夫。妻。恋。情。と。て。あ。は。れ。こ。ろ。こ。ろ。小。丑。の。せ。し。と。て。あ。は。れ。こ。ろ。こ。ろ。探。つ。流。步。し。て。出。る。小。塚。を。踏。ま。ぐ。ら。は。ら。撲。地。付。れ。玉。琴。お。ろ。り。て。走。出。ん。と。さ。る。を。後。僕。を。押。さ。め。轎。簾。を。撲。裡。と。お。ろ。せ。轎。裡。不。一。声。噫。と。哭。を。も。常。ど。逐。り。轎。を。擡。出。し。足。に。信。て。馳。去。けり。玉。昭。君。が。胡。地。不。適。一。韓。朋。が。妻。の。官。裡。不。摘。を。

も。新。ど。あ。め。と。せ。け。る。彼。度。逢。い。五。七。兩。此。辛。苦。致。を。得。て。俄。小。得。つ。た。ら。と。ま。ま。ぬ。新。細。緩。公。酒。を。嚙。一。て。蕪。公。醉。の。類。な。る。づ。

第八回 陷仇家 玉琴死節 過客店 倭文感操

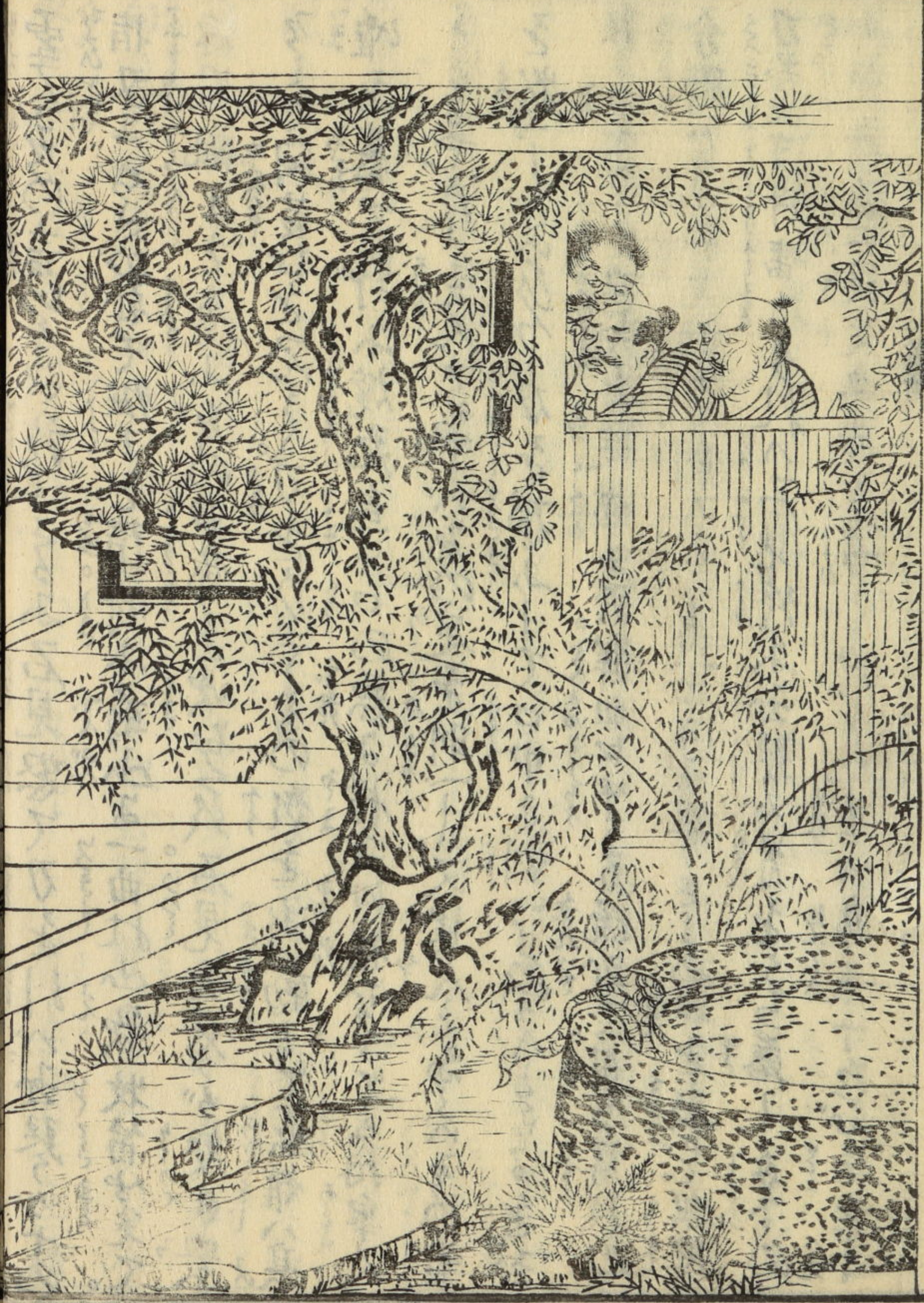
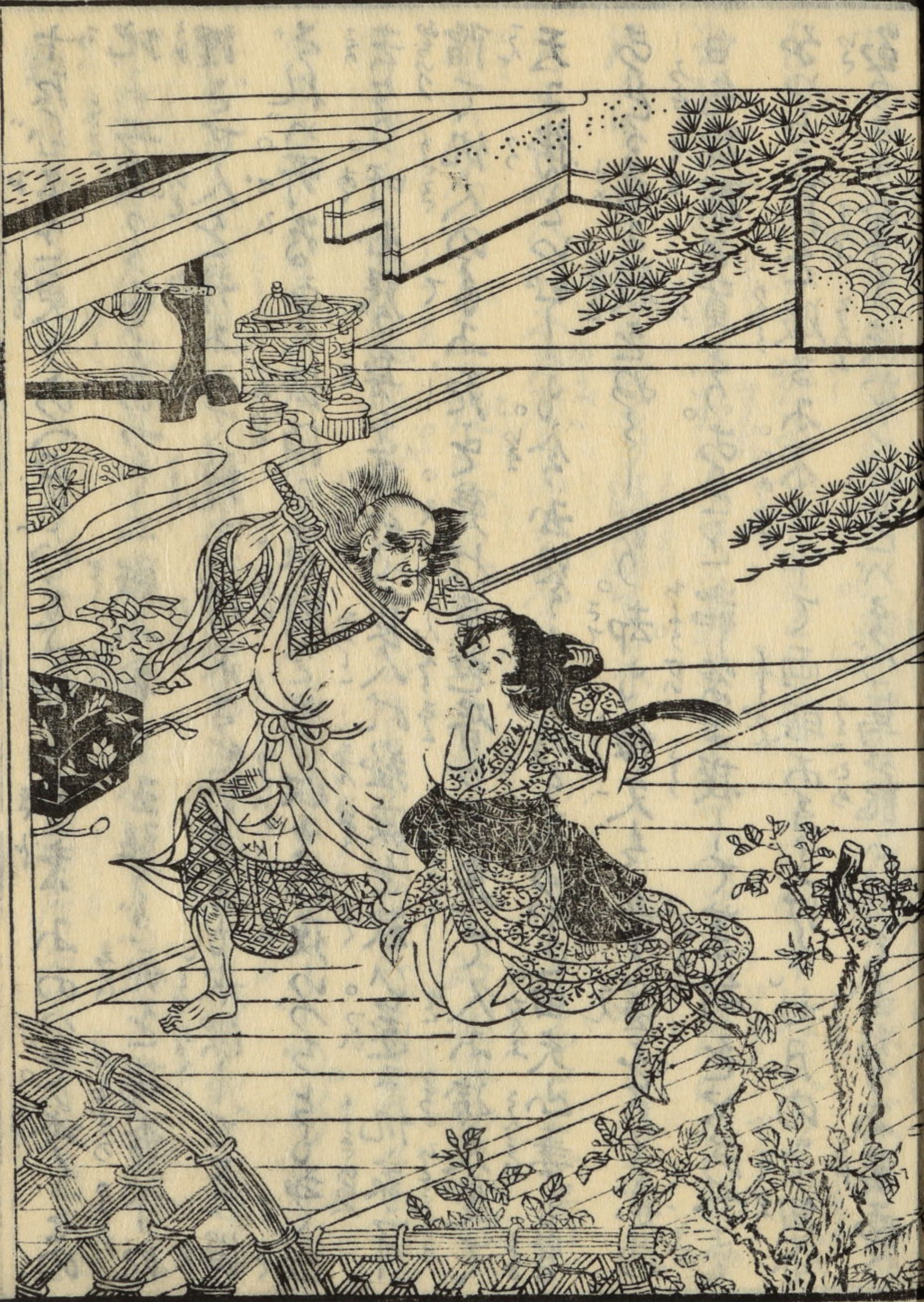
新。玉。琴。ハ。轎。裡。不。扛。と。は。只。骨。を。も。る。が。忽。地。一。軒。の。客。店。不。玉。琴。既。を。奉。て。乃。人。を。視。不。奉。紀。可。去。向。あ。ま。眉。白。く。髻。髪。を。相。親。總。て。凶。思。わ。り。依。波。麻。の。織。な。る。絹。布。の。涼。衫。不。緋。帶。を。後。心。坐。右。あ。ま。糸。鞋。の。腰。刀。の。め。げ。不。螺。鈿。の。刀。架。不。挂。たり。か。の。人。玉。琴。を。え。く。入。ふ。ま。ま。び。近。く。抱。け。を。て。い。く。お。の。せ。吉。蘇。れ。深。山。辺。あ。は。れ。ど。む。い。ふ。常。不。都。あ。も。交。加。く。情。の。ま。ら。も。ま。れ。る。あ。は。

た〜ちと持つたあり。孰うんを驚かさん。主人とあつた一面
の鏡をとり出し、云々いふは魏の武帝の菱花鏡より傍り。
それこそを秘苑とてむう〜と云々今母は贈〜と彼鏡を
与けしむ。お琴も〜と云々これと云々お背面お蘭菊は模様を
踏て玄丘の両字ありれば。下めて完示とてこの鏡は銘あり
やと問主人と云々。それを玄丘と号してその徳精鬼を錯鉄と
ありお琴と云々お家の名を石見太郎と云々いふは主人この
言を〜おひん〜と云々お庭を〜と云々お何と云々お
名をと〜お琴お琴う巴よ主人の舊名をとりてこれへお地柳眉を
踏て星眼を眸同稍久〜疾視て云々おは〜と云々お大人は
仇人あり。お淫昔に別志賀おお〜。お人永原お近を殺害し。

軍須財数万金とこの宝鏡を本集去らりと母親臨終お詠あり
了。既おおが〜おを〜。お二親もお命お死あり〜お今〜お
来る〜お盲亀の浮木よ遇優鉢羅は花をえること。只お身
翺〜して良人よ告あ〜お死を〜と敦圍て罵る石見冷
笑て云々お蚊蚋此心を買ん〜。お心おを〜お憶を〜お
お子〜お生涯款〜おを〜おお琴〜お怒〜お云々おれ〜お
家の婢と〜おお〜お幸よ身を〜おお〜おい〜おお〜お天を〜お
や〜お〜お鏡を抱て外面は走去〜おと〜お石見太郎お
遮〜おお〜おお〜おお〜おお〜おお〜おお〜おお〜お
恩を〜お養へお却仇と罵るこれ〜お刀を〜お鏡とて莫邪を
既〜おお〜おお〜お強て〜おお〜おお〜おお〜おお〜お

あつちを刺つてと責この時玉琴の隙をうらむく逃去んと
やむけりばあつちのち一言れ問ひ言ふも及ぶ頻る走去んと
を精一石見まづ中の鏡を復んとまよふ玉琴の遍さ
いとあつちをひしが遂に力歎一が尻をきりて彼明鏡をさ
うあげ疾の井欄へ投入り石見勃然とて大に怒らまら
玉琴が髪を掴て膝下より布眼を覗き一とつて長舌
の愚婦やとそ初に強顔風は花を散らまらるる。花衰て
風よむらふ。身をまづる舌を刺さる。いつあがこの熱腸を冷
つてと明見たる腰刀を引抜玉琴を引起してその刃を
面前に附て云海いよ。後まよや。玉琴雙手をりくその
刃を掴て云生て仇を復とあつち死して鬼とありて怨成

雲んその言いさびさるる石見怒て刀を引ハ玉琴の十の
指又よさかかて強くと墮時小前山は一曲此山歌牧笛やて
涼風流くと木目その曲節を吹かす石見玉琴が雙手
なして阿若むをえく。刀をりくその刃を衝動して云雉八真
唯を慕て野小焼死鳥ハ口の悪又憎る此指はくても海軍人
とまよやの走人とあつちの足を削一又罵んとあつちの舌
を刺つてとつひ刀を横みて口中に刺つぬえんとするを玉
琴口をりく。刀尖を腹嚙れ鮮血口中より流出て目も當れぬ
分野なり石見怒り刺人とそれども玉琴さふ刃を放じ忽地
刀尖二寸許嚙折られハ石見終ふ玉琴が首をもち落し下
小賊海道二夜又五郎を喰く。吾れ年未十た居を卜



十太むを更とくしんじいひかふる奇事ふありて永くこの
 地よ止るべしとていづる二賊ふ命じ玉琴が屍を揚奔下に
 埋せ人を井ふ入て鏡を擗米せけしとも水深いてそり得
 されハ所なるく俄頃子家財をそり収その夜つちとも出
 去り吁玉琴身をととく良人れ難疾を救ひ遂は仇家可
 陥て仇人の身不死と楚れ申包管が天定て人不務人定て
 天は勝といひ一も今玉琴が身のうそあやと田夫山毒も皆
 あとざるは後をぬきけり却も倭文と五十金をのりかの
 白毛猿猴を買とりあをを詔系は投して業創をとそのへて
 かつらこれを服るふ不日して西眼あきけく七月の下旬ふ
 びりるも金く快かりけしはまづ馬籠ふ終て玉琴ふ告あふ

せなやと彼度婆ふ終客れ姓氏をととへば元来旅客のとなふ
 をりく老波女も詳ふととと昔ふとふ旅く倭文とる慈ひ
 玉琴今已不岐祖ふ赴てより五七十日ふおふとも一度の信託か
 けハいふあやとむとろ躊躇て又もそりく家よ止りその音託
 をそりふ八月ふ及ともともそり一紙の雁書もあるとをなれば
 今いづろそりく致とて死と遂は啓終して岐祖ふおひに五
 七日終く馬籠ふあり彼ら是くとたけぬととも其れと志
 ぬるものもなりあまのふ索り終て中途は日ハくく漸航可
 のをいづろ只見山間ふ一軒れ家あり橋門半ゆりて裡面
 小籠の光見えけしはさる入る門とるふ屋ハ大れとも
 寂実とて人ありとも見えたり内房あやとえんと庭

月水奇録 卷之四

をきこえて倣備さび。性急て恨志あふか彼玄立の鏡も渠
か花のそるをえり。遠くまで郎がもよこそくあ。さうの頃さ
みりて身を穢さして夜も絶ん玉緒の心をそくもぢるさる。
其くその辛苦とらやひあつと。いひつゝもうち涙あり。倣文
うくくの苦節を感激し或も悲く或はさるる會徒絶絶を
そく早晩の夜うけたり唐李商隱夜半の他あり。只得て好
五更三點萬家眠 露欲為霜月墮烟
鬪鼠上堂蝙蝠出 玉琴時動倚窗絃
倣文の長途のつらさあやかひも月睡多るが忽地涼風會をたせ
いびき覺て左右をえりさ夜はひるく明て玉琴の傷はあつと
あつとつらと起きく四面を視せし家へまが新たれど人れ

倣もとも見えさき席薦さあつて花糞散とこれ簾あま蜘蛛
黄緑し。空房ふびさりけりうらうら只惘然と呆そく。お花疑ひつし
夜前よまをえしは揚柳下のまきとく。それとさるよ一張の短冊あり
て朝を浴ふ濡濡たり。何となくさうてあをえりよ。お琴がひいて
一首の和歌をえりさ。その歌あま
山雞の尾とは遠き燈の月さてや鏡の影るさ月心
倣文これを吟じてるは悲きてを玉珠を玄立の鏡をさる倣人とて
仇人の名は教されしと疑づるもそれよこのまをえりさ。あま
歌をあらう。あまの星をえりさ。あま一首の歌をえりさ。あま
分鏡の影をさる死を歎鳴宇節あまこれ義なる卦と教の感涙
葉とるにあつと。あま選してさるるを花苞の下はさる。あま菊花

月水奇録 卷之四

街道は般若あり。急磐と喚ば傳文このころふ春のさかひ
 多の妻を哀悼し。少刻般若の前よきて頻に榮殿系せしむ。
 恋磐の名ありといふ夫陽人の事を告げし。陰鬼の
 ありし夢を夢をとりてその事忘懐よりしとひども。
 この人ありしこの事あり。亦何ぞ疑人待あり澄とて。
 月暗秋窓蕉葉横
 遠逢二故客一夢殘處
 破簾風透惹幽情
 絃絶玉琴聞一聲

月水奇縁卷之四畢



